

## あの日あの頃 - 6

創立のころ

富田米子

十月五日(日)、澄み切った蒼空の下、第 32 回の大運動会が、サレジオのグラウンドで行われました。開会が宣せられ、お祈りの後、「あめのきさき」が全校生徒で歌い出されました。と、マイクから流れて来た素晴らしい声、そう、ダルフィオル神父様の懐しい声です。イタリ了から帰国なさっての久しぶりの歌声です。

途端に、私の臉からオリベッティの建物が薄れ、29 年前のサッカーで走り廻る 4A(二期)対 2A(四期)の勇姿がグラウンド上に飛びかいました。しかもそれを右へ左へ追っているのが、審判をつとめる若き日の私です。笛を口に息切れもせず走りました。本日運動会を行うこの土地とオリベッティの敷地と合わせた広さを使ってです。若かったですねえ～。そのメンバーの一人、五十嵐君は、今日は父母として(三年にお嬢さん(在学)本部)近くの席で応援に来てます。瞬時、思いが追想にふけていた耳元で、歌声がすうっと消えました。

その時、同窓会の記事は、ダルフィオル神父様のあれこれを...と思い当たりました。

学校の創立と共に音楽授業で児童に接せられただけでなく、合宿への参加、クリスマス聖劇の唱法指導等、神父様の影響は巣立った卒業生にどれだけの種を植えて育っている事でしょう。

昭和 30 年代から 40 年代へと音楽授業は、神父様と音楽担当教師とで指導していました。ベルカント唱法でのびやかに声を出す歌い方です。その日の授業を終え休み時間もあちこちのクラスから神父様のスータンに馳けよる様子は、ドン・ボスコの昭和版と言う光景でした。当時は、クラスの 2/3 近くがサレジオ幼稚園卒ですから、神父様の教え子がそのまま校庭に遊んでいるわけです。

合宿は、教会の無理のきく範囲で、優先的に同行していただきました。どんな時も、歌いながらの行動でした。子供達は、すぐ神父様の回りに輪を作りました。30 年来では口にするのが珍しい米国のガムを配って、親元を離れて淋しい子供達を喜ばせてもいました。

合宿を終えて帰る前は、必ずごミサで、感謝と祈りを教えていただきました。

山中湖の合宿でキャンプファイヤー中、イタリア歌曲を歌われた時、林をひびく声の美しさに近くの山荘の人々が、垣根に鈴生りで聞きほれていました。イタリアのオペラ歌手と間違えていたようです。特に「マンマ」や「フニクリ・フニクラ」は、楽しそうに体中から歌って、一度聞いたら忘れられぬ見事さでした。

クリスマスの聖劇では、劇を成功させるために、歌の指導を熱心にしていただきました。ただ、オペレッタの演出の時は、意見が違い困りました。歌い乍ら体を動かさず事を禁じられるのです。振り付け面で言うと、全く動きがなく盛り上がり欠けるので、動作をつけて歌わせるわけです。すると、

ならぬと言われ、火花が散ります。この体験は、阿部先生もなさり、一緒に劇を仕上げた歴史と共に、なつかしい忘れられない思い出の一コマです。

ここで大変いたずら好きな面を私に関わるエピソードで紹介します。

最初に担任した四期が六年になり、山中湖へ合宿の時、私も神父様も同行しました。最終日、例の「フジタヤ」へお土産買いに神父様と出発して行きました。私は宿舍の清掃のため残り、働いておりました。ほどなくして賑やかな声で戻って来ました。

「先生、ぼくたちのお世話になった気持を心ばかりの品で求めて来たの。受け取って!山梨名産の水晶のネックレスだよ。みんなで小遣いを出し合って買ったんだ。」(ここではてな?と思いました。と言うのは、出る前にお土産を目いっぱい買うので、東京に着いての家までの電車代を15円、30円と、何人かが私に借りていたからです。どうして小遣いが出せたか...と。)

「ねえ、早く開けて...」

と、包み紙は真新しい三越風(当時斬新な柄で大好評)のに、丁寧に包装された長細い品です。急がされるままに、みんなの見詰める前で解きました。

「キャー」

と、思わず叫んだのは、出てきたのは、蛇の亡き骸だったからです。一騒ぎあってから、子供達の言った説明を書きます。

お土産を買った帰路、この亡き骸も誰かが見付けたそうです。すると、男子には蛇の好きな児が必ずいますので、手にして歩き乍ら、担任の私が長い生き物が嫌いな日常を話題にしたそうです。それを聞いていた神父様が、私を篤かそうと案を出し、道に落ちていた包装紙を拾って、きれいに包んだのだそうです。作業が終って「せりふ」まで決めて楽しみに帰って来たのだそうです。しかも、八ミリ(当時最先端の機器)で驚く所を撮るつもりでいらしたら、少し到着が遅れ、間に合わなかったと残念がっていらっやったのです。

しかもこの様な茶目な出来事をもう一度体験させられました。

この二・三年後の事です。

今回と同じくイタリアへ帰国なさり、日本へ戻られた時のいたずらです。

イタリアへ帰国なさるので、職員で何か見つくろってお届けしました。半年ぐらい後に戻られた時、お土産が...との事で月当番の方が、教会に受け取りに参り、喜んでいただいできました。

ところが、私に特別土産があると白い細長い箱に入ったものを持ち帰って渡されました。私としては個人的に何故?と不審に思ったのですが、先生方と共に楽しみつつ開けました。中から白い紙に包まれて何やらもそもそしたものが動きます。そこで、紙を徐々に解きましたら、によるによると太い毛虫が出て来ました。キャーキャーと大騒ぎですが、後は、大爆笑でした。

でも、そのいたずらの中に、男子を担任していて、長い生き物が嫌いでは教える立場に欠ける

点がある。との無言の指示を感じ、今日では、子供と共に、手にとることができるまでに変わりました。神父様に感謝しています。

こうしたエピソードから、あの時代は、神父様が一同僚の様に先生方と過ごして下さっていた事を思い、創立期の人造りに貢献いただいた感じがします。

今、足がご不自由なため、小学校に顔を見せていただけないのを残念に思いつつ、創立期の神父様の横顔紹介を終えます。

【同窓会報、第6号—昭和62年2月1日発行—から転載】